



モーツァルト室内管弦楽団 第140回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester / 140. Regulärkonzert

〈楽団創立40周年記念シリーズ〉第14回
〈モーツァルトとハイドン〉その5

2011年3月4日(金) 午後7時 ■ いずみホール

Freitag, 4. März, 2011, 19:00Uhr *Izumihall*, Osaka

■主催：モーツァルト室内管弦楽団 <http://www.hi-ho.ne.jp/mozart/>

■協賛：いずみホール (財団法人 住友生命社会福祉事業団)

■マネジメント：大阪アーティスト協会 E-mail:artists@gol.com

〒530-0041 大阪市北区天神橋2-5-25-909 Tel 06-6135-0503

<http://www.oaa1985.com>



モーツァルト室内管弦楽団 第140回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester / 140. Regulärkonzert

2011年3月4日(金) 7:00pm. ● いずみホール

Freitag, 4. März, 2011, 19:00Uhr ● *Izumihall*, Osaka

〈楽団創立40周年記念シリーズ〉第14回

〈モーツァルトとハイドン〉その5

ハイドン

Joseph Haydn (1732-1809)

交響曲 第82番 ハ長調 Hob.I-82 《熊》

Sinfonie Nr.82 C-dur Hob.I-82 „L'Ours / Der Bär / The Bear“

- I. Vivace assai
- II. Allegretto
- III. Menuetto
- IV. Finale : Vivace assai

ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven (1770-1827)

ピアノ協奏曲 第1番 ハ長調 作品15

Konzert Nr.1 für Klavier und Orchester C-dur op.15

- I. Allegro con brio
- II. Largo
- III. Rondo : Allegro

* * *

モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

交響曲 第41番 ハ長調 K.551 《ジュピター》

Sinfonie Nr.41 C-dur KV551 „Jupiter-Sinfonie“

- I. Allegro vivace
- II. Andante cantabile
- III. Menuetto : Allegretto
- IV. Molto Allegro

ピアノ：宮崎 剛 / Klavier : Takeshi Miyazaki

管弦楽：モーツァルト室内管弦楽団 / Orchester : Mozart-Kammerorchester

指揮：門 良一 / Dirigent : Ryoichi Kado

ハイドン：交響曲 第82番《熊》

ハイドンは29歳から58歳までの約30年間にわたってハンガリーのエステルハージ侯爵家に仕えたので、モーツァルトとは全く違ってほとんど旅行らしい旅行をしていない（彼のした旅行といえば、59歳からのあしかけ5年の2回にわたったロンドン旅行のみである）。それにもかかわらずハイドンの作品はヨーロッパ中に広く知られており、楽長として迎えたいとの熱心な勧誘がたびたびあったのである。1785～6年の6曲からなる《パリ交響曲》（第82～87番）もそうしたハイドンの人気を示すもので、パリの有名なオーケストラ「コンセール・ドゥ・ラ・ロージュ・オランピック」からの依頼によって作曲された。このオーケストラの創立者のひとりであるドーニ（d'Ogni）伯爵はハイドンの熱烈な賛美者であり、後に3曲の交響曲（第90～92番、第92番は《オックスフォード》の名で知られる）を献じられている。因みに、モーツァルトの《パリ交響曲》（第31番、K.297）は1778年に作曲され、このオーケストラとは別の先行していた団体「コンセール・スピリチュエル」によって初演されている。

ハイドンの《パリ交響曲》のうち3曲に名前が付いており、第82番が《熊》、第83番が《めんどり》、第85番が《王妃》と呼ばれている。前二者は曲中にそれぞれの動物の挙動を連想させる部分があることから、後者は王妃マリー・アントワネットが愛好したとされることから来ており、いずれも作曲者自身が付けたものではない。作曲された順序も付けられた番号どおりではなく、第82番は実際には6曲中の最後の作品である。当時のパリのオーケストラは60人ほどの奏者を有する大編成のものであったが、速いハンガリーにはその情報は伝わらずハイドンはそれよりずっと小規模なエステルハージ家の宮廷楽団向けのスタイルで作曲をした。したがって管楽器ではクラリネットが使われておらず、またトランペットとティンパニが使われているのはこの第82番とその直前に位置する第86番の2曲だけである。

第82番はその堂々たる内容にふさわしいハ長調という調性が選ばれており、全曲がエネルギッシュで生き生きとした音楽である。わかりやすさとともに随所に意外性が置かれており、聴き手をあきさせない。特に終楽章は圧巻で、《熊の首振り運動》を思わせる音型の持続音を中心に速いテンポでめまぐるしく展開していき、最後はハイドンお得意の5度の「バグパイブ・コード」が鳴り続ける中、主題が繰り返されて華やかに終わる。聴くものすべてが高揚感に満たされて充足するハイドンならではのエンディングである。

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第1番

ベートーヴェンのピアノ協奏曲は全部で5曲ある。そのはじめの2曲は出版の都合で順番が入れ替わっていて「第2番」作品19のほうがこの「第1番」作品15より先の作品とされてきたが、最近の研究によれば「第2番」のほうが早く着手されたけれども、完成はどちらも1795年ということのようである。彼の交響曲第1番はこれより5年ほど後に作曲されているので、このピアノ協奏曲第1番がベートーヴェンの最初の交響的作品といえるであろう（厳密に言えばピアノ協奏曲第2番もそうなのだが、こちらのほうは第1番に比べてオーケストラ編成がかなり小規模である）。さて、ピアノ協奏曲といえば先輩モーツァルトが実に23曲もの名曲を残しているので、ベートーヴェンも当然その影響を受けざるを得ない。同じハ長調の第25番K.503の影響がうかがえる。第1楽章でピアノがはじめて登場するところでは、モーツァルトの「花道」（ピアノが第1主題を弾く前に導入的なパッセージを弾くたち。歌舞伎役者が「見得を切る」場所にちなんで筆者はこう呼んでいる）のスタイルを踏襲している。またハイドンの交響曲の影響も見逃せない（第1楽章の第2主題のはじまるころなど）。しかし全体として男らしい豪放な性格、少々雑なところもあるが雄大で堂々とした表現は、この時期にして立派にベートーヴェンらしさを出している。終楽章の終了直前、テンポが遅くなってフェルマータで止まり、次の瞬間脱兎のごとく駆け抜けるころなど、第5番《皇帝》の終わりの部分（ティンパニ・ソロとピアノがからむ）と好一对である。また、第2楽章の大胆なクラリネット・ソロの扱いは、あのクラリネット好きのモーツァルトもびっくりの新機軸である。

モーツァルト：交響曲 第41番《ジュピター》

死の3年前、1788年にモーツァルトは交響曲を3曲、まとめて書いている。第39、40、41番がそれで、〈3大交響曲〉と呼ばれており、その年の6月から8月にかけての3ヶ月ほどの間に書かれたことはモーツァルトの天才性を示す顕著な例として有名である。彼の交響曲は実際には60曲以上もあり、ハイドンの104曲には及ばないが、その生涯はハイドンの半分以下であったから膨大な数といえよう。しかしそのほとんどが若いときのもので、交響曲というジャンルがまだコンサートの中心演目ではなく、コンサートの開始を告げる合図程度の位置付けだった頃の作品である。このような交響曲の量産は18歳でピタッと止まっており、22歳のときの第31番《パリ》からはじまる「後期」の交響曲は10曲に過ぎない（「第37番」と番号付けされた曲は第1楽章の序奏を除いてモーツァルトの作品ではなく、ハイドンの弟、ミヒャエル・ハイドンの作である）。

成人してからはこのようにより熱心ではなかった交響曲の分野で、突然3曲ものまとめ書きをしたのはなぜか。それにはその2年前に作曲されたハイドンの《パリ交響曲》の影響が考えられる。〈3大交響曲〉のそれぞれの調、変ホ長調、ト短調、ハ長調が、ハイドンの《パリ交響曲》の最初の3曲（第82番ハ長調、第83番ト短調、第84番変ホ長調）の調と順序こそ違えビタリと一致するからである。モーツァルトはオペラやピアノ協奏曲のような、自己の多様な感性を存分に発揮できるような分野は得意であるが、交響曲や弦楽四重奏曲といったやや厳格な形式を必要とする分野は得意でなかった。弦楽四重奏曲においてはハイドンの作品をモデルにしたことを、〈ハイドン・セット〉と呼ばれる6曲の曲集のハイドンへの献呈の辞で正直に述べている。〈3大交響曲〉においてモーツァルト自身のこのような表明はないけれども、これは交響曲における〈ハイドン・セット〉とっていいのではないだろうか。

ハイドンからの刺激によって作られた〈3大交響曲〉ではあるが、出来上がった作品はそのモデルとはかなり違っている。ハイドンとモーツァルトは24歳もの年齢差を越えて互いに尊敬しあい、影響を与えあっていたが、それぞれの目指した音楽は非常に異なったものだった。《ジュピター》に関していえば、第1楽章はハイドンの《熊》のその単純明快さを大いに取り入れており、かなり似たところがある。だが第2楽章以降は全く違うものになっている。モーツァルトはハイドンのような無邪気な緩徐楽章は書けなくなっていた。《ジュピター》の第2楽章におけるモーツァルトはもはやロマン派といえるのではないか（因みに、ハイドンはロンドンでモーツァルトの死の報に接した後、交響曲第98番の第2楽章において《ジュピター》の第2楽章を模倣してオマージュとしている）。一見堂々としたメヌエットも半音階の多用によって不安な雰囲気醸し出している。トリオ（メヌエットの中間部）も寂しげで、その後半部は悲痛な叫びに聴こえる。フィナーレにおいてはバロック時代のフーガの技法を取り入れ、バロックのポリフォニー（多声音楽）と古典派のモノフォニー（単声音楽）との融合を図るということをやっている。この「諸様式の融合」こそがモーツァルト芸術の本質であり、その象徴的な表れが《ジュピター》のフィナーレ楽章のコーダ（終結部）で、そこではその楽章で使われたすべての動機が同時に鳴り響くという、宇宙の進行もかくあらんかと思わせる壮大な音楽となっている。だが、神のなせる業としか思えない完璧なこの音楽に、かえってひそかな悲劇性を感じるのは筆者だけであろうか。

第141回定期演奏会

〈クライネ・モーツァルト〉第78回例会

2011年4月23日（土）午後2時●中央電気倶楽部

〈モーツァルトの室内楽〉

ディヴェルティメント 変ロ長調 K.137(弦楽四重奏)

ディヴェルティメント 変ホ長調 K.563(弦楽三重奏)

未完成クラリネット五重奏曲の断章

クラリネット五重奏曲 イ長調 K.581

ヴァイオリン：釋 伸司、納庄麻里子

ヴィオラ：佐份利祐子 チェロ：日野俊介

クラリネット：高橋 博 お話：門 良一

第142回定期演奏会

2011年7月9日（土）午後2時●いずみホール

〈ベートーヴェン・シリーズ〉その1

ベートーヴェン

序曲《コリオラン》Op.62

ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 Op.37

交響曲 第4番 変ロ長調 Op.60

ピアノ：内田鈴子

指揮：門 良一



門 良一 ●指揮

Ryoichi Kado, Dirigent

1939年大阪生まれ。フルートを曾根亮一氏に、指揮法を青山政雄氏に師事。62年京都大学理学部卒業、67年同大学院修了。70年同志とともにモーツァルト室内管弦楽団を創立、常任指揮者となり現在に至る。87年、モーツァルトのピアノ協奏曲全27曲、交響曲全74曲の連続演奏完結に対し、モーツァルト室内管弦楽団とともに第5回藤堂音楽賞を受賞。

1982年より、NHK大阪文化センター、1992年より、同神戸文化センター「モーツァルトを聴く」の講師を務め、現在に至る。京都産業大学名誉教授。



宮崎 剛 ●ピアノ

Takeshi Miyazaki, Klavier

武蔵野音楽大学卒業、大阪音楽大学大学院修了。大学卒業以来、毎年のリサイタル、大阪フィル、関西フィル、大阪交響楽団、ルーマニア室内管など内外のオーケストラとの共演や、国内外で多くの依頼公演を行うなど、その活動は多岐にわたっている。その演奏は「音楽の友」「ムジカノヴァ」などで紹介され「厚みがありダイナミックで多彩な音色を持つ」と評価が高く、それらは二枚のライヴCDで楽しむことが出来る。また指揮、作編曲もこなし、特にピアノを演奏しながら管弦楽や合唱と共演する「弾き振り」の分野では、奏者聴衆一体となった音楽が、独自の領域を築きつつある。一方、大阪音大や同付属音楽院で講師を歴任。府立岸和田高校や宝塚音楽学校で講師を務めるなど、後進の指導にも熱心である。また、各地の文化センターでの「生演奏」つき講座は、一般音楽愛好家の高評価を得ている。NHK-FM名曲リサイタル出演、大阪府芸術劇場奨励新人賞、和泉市文化功労賞受賞。日本演奏連盟会員。

近況はこちら→<http://www.takeshi-piano.com>



モーツァルト室内管弦楽団 Mozart - Kammerorchester

1970年に指揮者 門 良一によって設立され、40年間一貫して30数名のメンバー構成を維持するわが国では数少ない本格的室内オーケストラである。レパートリーはモーツァルト、ハイドンを中心とした古典派からバロック、前期ロマン派に及び、最近ではフランス近代の作品にも手を伸ばしている。モーツァルトに関しては交響曲と協奏曲の全曲を演奏した日本唯一のオーケ

ストラであり、創立当初から新モーツァルト全集に準拠した楽譜を使用していることは注目に値する。'91年のモーツァルト没後200年に際しては2年にわたり記念シリーズを催し、なかでもモーツァルトの予約演奏会プログラムを完全に再現した日本初の企画は大いに話題を呼んだ。演奏スタイルは中規模編成の特色をフルに生かしたもので、的確なテンポ、明快なリズム、清澄なサウンドは定評のあるところである。関西一円で演奏活動を展開するなかで'90年からは大阪いずみホールを本拠として定期演奏会を、また東京定期演奏会には既に16回を数えている。海外では'88年にはドイツ民主共和国文化省の招聘による旧東独国内への演奏旅行を成功させている。内外の著名アーティストと数多く協演しており、なかでもマリア・ジョアオ・ピリス('85、'87年)、シブリアン・カツァリス('93、'94年)、ペーター・ダム('83、'86、'88、'98、'00年)、ウィーンフィル本管アンサンブル('86年)、ライナー・キュッヒル('90年)らとの名協演はいまま語り草となっている。'91年に姉妹団体、モーツァルト記念合唱団を誕生させ宗教曲などで活発に協演するほか、'93年には堺シティオペラとの協力による〈モーツァルト・オペラシリーズ〉を開始し、いずれも好評をもって迎えられている。'06年1月にはモーツァルト生誕250年記念特別企画としてオペラ《イドメネオ》の世界初オリジナル・ノーカット版演奏会形式上演を挙行し絶賛を浴びた。—「すばらしい成果」(毎日新聞)、「この楽団は注目」(朝日新聞)。2007~9年には〈没後200年記念ハイドン・シリーズ〉(全10回)を開催。2009年からは3年間にわたる〈創立40周年記念シリーズ〉を開始している。

モーツァルト室内管弦楽団 / 出演メンバー

コンサートマスター ● 釋 伸司

第1ヴァイオリン	釋 伸司	川島多美子	チェロ	日野 俊介	クラリネット	高橋 博
	中川 衛子	原田 潤一		大西 泰徳		門 小夜子
	稲庭真理子	幣 晴代		ダヴィッド・フィッシャー	ファゴット	佐伯 利之
	北村 奈美	納庄麻里子		三宅 香織		倉永 晴美
	大西 秀朋	道幸 明美	ヴィオラ	コントラバス	ホルン	佐藤 明美
	菊池 優理	森永 愛子		フルート		垣本奈緒子
	中野 瑞己	三上 哲		オーボエ	トランペット	大西 由起
第2ヴァイオリン	本多 智子	高野ちか子		戸田めぐみ		滝村 洋子
	清水めぐみ			中江 暁子	ティンパニ	泉 純太郎

会 長 岡 本 道 雄 (京 都 大 学 名 誉 教 授)
理 事 谷 口 安 平 (京 都 大 学 名 誉 教 授) 森 井 清 二 (関 西 電 力 株 式 会 社 顧 問)
吉 野 泰 生 (住 友 生 命 保 険 相 互 会 社 名 誉 顧 問)
(50音順)
顧 問 橋 下 徹 (大 阪 府 知 事 : 申 請 中) 平 松 邦 夫 (大 阪 市 長)
伊 藤 郁 太 郎 (大 阪 市 立 東 洋 陶 磁 美 術 館 館 長) 梅 原 猛 (国 際 日 本 文 化 研 究 セ ン タ ー 顧 問)

法人会員 (50音順)

荒川化学工業	サントリーホールディングス	大同ケミカルエンジニアリング	丸山興産
井上冷熱	住友金属工業	高松建設	三井住友カード
関西電力	住友精密工業	日本通運京都旅行支店	
きんでん	住友生命保険	林 六	
小林製菓	住友倉庫	福山製紙	
阪野商店	ダイキン工業	丸 紅	

個人会員 (入会順、敬称略)

松井繁一	石上豊子	桑名孝子	冠 大五	千 宗守	山村哲夫
深田晴世	村本孝夫	石光正男	有賀照雄	荒木陽子	連水洋紀
河野幹雄	松本幸道	松枝正明	佐野哲郎	宮崎悦朗	安井敏雄
河野奈津子	笹川忠士	松枝多加子	小柳陽一	栗原順子	天尾登博
福岡隆子	緒林桂子	高杉方宏	田中四郎	完倉正信	橋本博
梅原一哲	碓井昭彦	川島弘章	村西良彦	野口祐三	川添和子
石本三千也	碓井みち子	川島啓助	島村 猛	野口外志子	梁瀬健一
田村真也	長井重龜	坂本緯子	河原恭子	森本武	松山壽一
岸田克己	岸田多門	中井武司	松井とも子	小山浩	松谷郁子
梅村博也	能田 豊	中井佐和子	得田栄蔵	野原清秀	山下鉄男
屋良正治	森内達治	豊田成子	菱谷勝次郎	堀 正二	古川法史
國友正和	宮井茂治	切畑敦詞	足立宣治	中野 勇	萬野尊昭
稲垣千代子	祐野尚子	中東富佐子	東 武次郎	松井基純	上田富士子
浮田俊太郎	金定秀光	三石武男	竹林 大	松井香代子	植田史子
桑山 弘	金定嘉也子	内藤芳美	豊田紘生	山本道子	松本桂子
三谷郁子	中嶋允子	佐野廣子	奥野哲久	大磯隆一	佐野哲昭
三浦信一郎	福岡昭吉	神林恒道	飯田祐子	細井提吉	池田 米
水島敬夫	菅 正徳	杉浦和子	宮井芳子	大谷弘枝	八木孝昌
渡辺優子	日高 徳	野村 透	塩脇昭司	満谷昭夫	高田早智子
平川美津子	藤原啓助	佐野雅祥	塩脇祥子	原 喜代志	大西富久子
安藤邦洋	馬場明和	今井安男	一木 晃	大原清司	
橋本太三雄	阪野和子	玉手隆子	岩崎弘一	大原典子	
阿部由美子	宮川泰濟	野崎志朗	河濑清子	伊藤久栄	
中川泰幸	和田暁夫	橋本靖昭	佐竹時子	福谷 巖	

会 費・個人会員につきましては年会費1口2万円です。

・法人会員につきましては年会費1口10万円です。

(有効期間は入会時より1年間です。)
随時ご入会いただけます。

会員の特典・年間6回の自主公演にご招待致します。(1口につき個人各1枚、法人各5枚)

・ご同伴者は10%割引となります。

・関連演奏会のご案内又はご優待を致します。

・定期演奏会プログラムにご芳名を記載させていただきます。

・会報「ディヴェルティメント」をお送り致します。